

外から見た日本の車

文学部教授 多久和 新 爾

● 昨年(1983年)3月末、福岡空港から北京に直行した30余名の団体旅行客は、ピカピカの日本製バスに乘せられ、3泊4日という多忙な観光をすませた。私もこのバスで、3日目に万里の長城で名高い八達嶺を訪れた。長城はすっかり修復され、40余年前の面影はふもとに点在する農家にのみ残っていた。宿舎に戻ると、庭に咲く白い花が桜によく似ていると家内が驚いた。部屋のテレビは名古屋の自動車工場で働く日本の若者たちを放映していた。

● その年の11月早朝、私はひとりでニューヨーク国際空港からコネチカット州行きのリムジーンに乗った。車体は古く座席は固かった。初老の運転手は次々に4名の客を拾ってから、ハイウェイに入った。美しく紅葉した樹木の間に立ち並ぶ沿道の民家のたたずまい、海の色、ニューイングランドの風景は14年前と少しも変わっていない。変わっているのは、日本製の小さな車が巨大なアメリカのトラックや大型車にまじって、軽快に走っている姿である。真新しい日本の乗用車を運転する中年の白人女性が、私達の車を追い抜きざまに、白い歯を見せるほどに笑って去った。

● 終点のニュー・ヘイヴン市で下車。翌朝、イエール大学院に近いグローブ・ストリート墓地で、N.H.ピアソン先生(1976年没、66才)のお墓にめぐり逢うことができた。1米弱の高さしかない

大理石の墓表には、先生の名前と生没の年号、そしてSON AND SERVANT OF YALEと刻まれていた。ホーソーン学者であり、蒐集家であり、偉大な教師でもあった先生の愛車は、自動的に窓を上下できる当時的高级車であった。青年時代、先生は高名な人類学者マリノフスキーと共に数年研究し、影響を受けた。先生のお墓がすぐ近くにあることを、イエール大学大学院アメリカ研究科主任のルイス教授は御存知なかった。宿に帰って、ローカル・ニュースをテレビで見る。日本の自動車輸出自主規制が来年も続行されると聞いて、とびあがらんばかりによるこぶデトロイトの自動車工場で働く人たちと、阿倍晋太郎外相の姿とをダブらせて放送している。

● 同月3日から才9回A S A(アメリカ研究)大会に出席。6日の夕方、ダラス空港から小型のプロペラ機でテキサスのウェイコー空港に予定より早く到着。ベイラー大学からマッキニー教授はじめ10名の出迎えで驚く。同教授のワゴン車は大型で、空港も広大だった。

● さて、8月1日にはタイム誌が実にユニークな総合的日本特集号を出した。その日本語版は10月出版、今年の2月までに38版という売れ行きである。経済から文化面まで取材範囲は広く鋭い。だが不思議なことは、日本の車には数行ふれただけである。

(日米比較文化論・比較文学)

NEW MEDIA

夢の図書館

杉野 哲 谷

品 川 寿 子

今年(昭和59年)の1月23日我国初の実用放送衛星「BS-2a」(愛称ゆり2号a)が種子島より打ち上げられ、ニューメディア社会への道が開かれました。これとの関連において、利用する側、提供する側それぞれにとって夢の図書館とはどんなものか以下考えてみる事にしましょう。

ニューメディアの導入により、従来の手作業による受入や目録カード作りが機械に置き変わり、伝票を切る手間も省かれ図書館間ネットワークにより、情報量の急激な増加や、高度で迅速な情報要求にも十分対応出来る様になる事でしょう。そして紙を媒体とした情報(図書館及び雑誌etc.)から磁気を媒体とした情報(Disc、MT、ビデオ、レーザーディスクetc.)へと取り扱う媒体も変わっ

て行き、名称も図書館ではなく、情報館と呼ばれるかも知れません。そしてその中は従来の本、雑誌が整然と並んでいる光景から一変してコンピュータ、端末機、ディスクその他の電子工学機器が並ぶ感じになるかも知れません。そしてそこでの利用者は、それぞれの必要に応じて、端末にあ

るいはその他の視聴覚機器に向かってる事でしよう。これにより必要な情報があらゆる所から瞬時に集められ、蔵書数で図書館や個人の評価をする価値感はなくなくなり情報格差はなくなるものと思われます。

そしてそこで働く我々司書は、利用者への助言や指導に当る一方、よりよく情報を利用する為の2次情報〔従来の目録、所在、主題、抄録プラス評価情報(思想統制にならない範囲で)etc.〕を作成、提供する事により、利用する側、提供する側お互いの欲求が満され、夢の図書館という事になるものと思われます。

(情報サービス課・電算係)

現在いろいろな分野で機械化が進んでいます。図書館とても例外ではなく、目録情報のオンラインデータベース化、閲覧など図書館業務のコンピュータ処理など、これによってオンラインによる情報検索が図書館のサービスとして提供されるようになりました。

それでは図書館実務に携わる者として将来の図書館はどうなるのか、コンピュータの知識などひとかけらもないライブラリアンの夢。

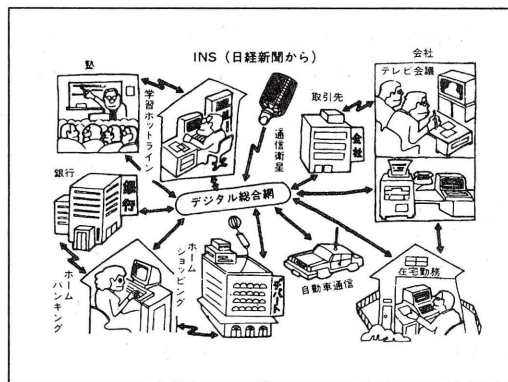
キーボード付ビデオ端末機に向かい購入図書重複調査、自館のデータベースより検索。目録作成も勿論オンラインシステムより取りだし、自館のデータベースにレコード、あの気の遠くなるようなカード配列もありません。超マイクロや

光ディスクの開発で「紙」を使用しない出版物もできましよう。本のない図書館が出現するかもしれません。と云うことは排架、排列は正という仕事もなくなりそうです。利用者も端末機を使ってオンライン検索システムにアクセスすることができ、ファクシミリ端末を使って即座に情報を入手

できます。又通信システムによって家庭や職場で居ながらにして情報を得ることができでしよう。本のない機械だけが整然と並んだ、まるでSFの世界のような図書館が出現するかもしれません。

でも膨大な目録カードから目指す資料を捜した時、いろいろな二次資料(書誌・索引)を引っぱりまわして目指す文献を捜し求めた時のあの感激は味わうことができないかも知れせん。図書館でふと出会った紙とインクと少し埃っぽい匂いの一冊の本。「知識の宝庫」と云われた図書館。ずっと先には図書館博物館なるもので出会うことになるかも知れせん。

(整理課・洋書整理係)



NEW MEDIA

夢の図書館

津田 鶴太郎

森田 陽子

「夢の図書館」と言うとは何かファンタジーの世界に落ち込んだ感じがするが、私は専攻の関係上、現実的なことについて述べてみたい。

今やコンピュータ・ブームの中、情報化社会（脱工業化社会）という言葉は我々、就職をひかえた学生にとって、忘れられない言葉（条件）のひとつであろう。今から先、企業が社会の中で生きていくために様々な情報を必要とすることは、我々が企業をつかむために情報を集めることと、同じようなものである。情報とは食事のおかずとは成りえなくとも、その味付けのためのスパイスのようなものであらうと私は思う。だから、我々はこの氾濫した情報の中から、真に自分に必要なものを見だし、利用しなければならないのである。

随分と抽象的なことを書いてしまったようだが、これが現実に、かつ、我々の身近なものはというと図書館であろう。色々な人々の「情報」が、「活字」という媒体を通して我々に無料で提供されているのである。これを利用しない法があるか。コンピュータ利用法のひとつとして情報検索というのがある。これなどは将来、図書館に取り入れられても良いひとつのコンピュータ・システムであろう。つまり、今までカードの型で整理されていた情報をコンピュータの補助記憶装置上におき、各ワークステーションから（テレビなどで宣伝されているパソコンを想像されたい）瞬時に必要な情報を取り出すのである。

このように発達（こう言うのはおかしいであらうがあえてこの言葉を使用）していく図書館を、我々はもっと利用しようではないか。いや、利用しなければならないのではなからうか。

(商学部経営学科3年)

図書館という所は、静かで厳粛な空間であり、ただ落ち着いて書物を眺めることができれば、それで十分だと私は思います。そこがかえってメルヘンティックなものであったり、和気あいあいとした雰囲気のものであったら、もう静かな空間ではなくなり、図書館としての意味を持たないものになるでしょう。そうすると、夢・図書館という、どちらかと言えば、互いに逆の要素を持ち合わせている両者は、私の頭の中では、どうしてもうまく結びつかないような気がするのですが…。しかし、本質的な役目を損わない程度に、夢の図書館について考えてみると、それは半ば現実味を帯びたものとなってきます。

つまり、実現不可能ではない夢の図書館、例えば機械化をとり入れた、グリーンと便利な図書館です。今の図書館には目録はあっても、それによって本の内容を知るといことはできません。そのために、目録で調べて本を手にしても、期待すべき内容について記されておらず、再び目録を調べ直さなくてはならないということも起きてきます。そこで、ここに機械化をとり入れるのです。例えば、ポンとスイッチを押して知りたい項目を記せば、それについて記されている書名が出てきて一目瞭然という具合にするとか、或いは、書名を記せば、即、その概要が把握できるといった具合にするとか…。例をあげれば切りがありません。

こんな夢のような図書館が実現されるとしたら、本当に心強いですネ。しかし、もしかしたら、それが夢ではなくなり、現実のものとなる日が来るかもしれません。その日までは、まだ、夢の図書館です。

(文学部国際文化学科3年)

社会人と読書

— 先輩より後輩へ —

諸 石 芳 徳



私は少なからず戸惑った。
大学を出て10年程度がたった、いわゆるビジネス社会の最前線で働く者として、— 自己啓発のための読書ということで何かを書いてくれ — との依頼をうけたのである。

学生時代は別として、社会人になってから果して自分は職業人として、又社会人として自分を磨くための読書ということに時間をさいているだろうかという事を考えた場合、はずかしい限りであるがほとんどそういうことに時間を費していないのである。いま母校の図書館よりこの原稿依頼をうけて、卒論に追われて通った、あるいは定期試験中に通った図書館のことを改めて思い出している。10年もたてば、きつかった事でやはりなつかしい事として思い起こすことができる。あの受付のカウンターの少々無愛想ではあったが、美人の職員の方は、今はどうしておられるのだろうか等と、そんな事もふと思ったりもした。

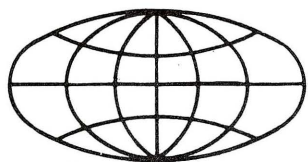
私は今、某金融機関で働いており、悲しいかな、いわゆる5時に退社できる身の上にはない。仕事に追われる毎日であり、仕事のうえでどうしても必要な実務的な本は読むが、自分自身を肥やすというか、豊かにする、というような教養のための「読書」の時間がほとんどないというのが現状である。このようなケースがビジネスマンの大方の者にあてはまるのではないだろうか。従って言い

ふるされた事ではあるが、現役の学生の方達、特に私のようにビジネス社会に出ていこうとされる方達に助言できる事は、比較的自由な時間がある大学の4年間に本を読んでおけということである。そして単位を取るための本の読み方も大切であろうが、しかしそういう大学での教科書の学問がビジネス社会で直接に役立つという事は稀であり、従って本を読むなら、人間の本質的な何かを高める本の読み方をしてもらいたいということである。

なお、図書館の機関紙にこんな事を書いていいのかわからないが、人間の本質を高めるという事に関連して、自分の学生時代を振り返った時にちょっと気にとまったものだから……。自分を高める方法として「読書」があるのはもちろんだが、その他にもいろんな手段がある。幸い、西南学院大学はキリスト教主義に基づいた精神教育が行われており、その一環として「チャペル」という時間が設けられている。自分ができなかったから反省をこめて思うのであるが、チャペルに毎回出席して講演を聞いたら、4年間で計り知れない人間の本質の高揚になる。若者の間で活字離れが顕著であると聞き、どうしても活字が嫌いな諸君は実行してもらいたい。

何かととりとめのない一文になってしまったが私にとっての「読書」とは、即ち人間の本質を高めるもの、ということができる。

(昭和50年商学部卒業)



外国図書館シリーズ

— 中 国 —

北 京 図 書 館

(中国国家図書館)

文学部教授 樋口 進

北京図書館はテレビなどでよく見かける紫禁城(天安門、故宮博物院)の西北、景色の美しい北海公園の西側にある。

正式の呼称を「中国国家図書館」と言い、その名の通り、中国の代表的な図書館である。ただし、呼称のほうは一般には昔通り北京図書館でとおっている。昨年の11月、私はこの図書館に約3週間ほどかよった。

この図書館の前身は清朝末期にできた京師図書館で、南宋・明の帝室図書室であった輯熙殿・文淵閣の蔵書を基礎にして発足した。

写真の、御殿のような建物が本館(1931年建築)で、閲覧等の業務は大体この本館で行われている。他の付属建造物を含め、建築延べ面積は約5万平方メートルという。

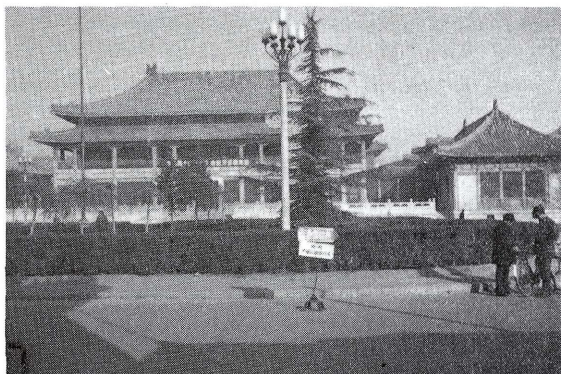
開館は朝8時から午後8

時まで、土曜日が休館日で、従業員は950人余りである。敷地はどのくらいあるのか見当もつかないが、とにかく広々としていて環境が良い。私は昼休みには大体そばの北海公園に出掛け、散策したり、食事をしたりしていたが、時にはそのまま図書館に戻らないこともあった。

蔵書は約1,100万冊(1982年度調べ)、内訳は、図書が557万冊、雑誌が447万冊、各国政府・国連の刊行物が28万冊、歴代の写本、版本、革命文献などが60万冊、それに新聞が約3,600種である。

外国のものは115か国に及んでいるが、その中で英語、ロシア語、日本語のものが多く、独語、仏語のものがそれに次ぐ。

私たちの仲間では、古典は北京図書館へ、近代・現代のものは上海図書館へというのが通説になっているが、その言葉通り、この図書館の特徴はなんといっても古籍善本(内容も校正もよく行き届いている古い書籍)のコレクションであろう。全部を挙げるわけにはいかないので、中でも特に有名なものを数点紹介すると、北魏太安4年(458



(北京図書館)

年)の敦煌写経「戒録」、北宋初期の版本「開寶蔵」、明朝の写本「永樂大典」、清朝乾隆年間編集の叢書「四庫全書」の文津閣本、それにチベット語の明代版本「七仏如来本願経」、蒙古語の「ジンギスカン伝」、「元朝秘史」、満州語の「清会典」、「蒙古源

流」などがある。また解放(1949年)後は、マルクス主義、毛沢東思想に関する研究著作の収集に力を入れ、現在も貴重な書籍、初版本などが続々と入庫している。

近年、国際交流も盛んとなり、諸外国の2千近い図書館・研究所と図書・資料の交換を行っている。また館内で見かける外国人の数も多い。

建物や施設は古いが、閑静で落ち着いて読書ができる場所である。私はわずか3週間ではあったが、よい印象を抱いてこの図書館をあとにした。

(現代中国文学)

各種研修会参加レポート

「第4回大学図書館研究集会」に参加して

荒川 勇

第4回大学図書館研究集会は、昭和58年9月12、13日の両日、埼玉県嵐山の国立婦人教育会館で、「大学図書館情報システム化をめぐる諸問題」をテーマに、パネルディスカッション、2日間にわたる分科会、最後に全体会という構成で行われた。

パネルディスカッションでは、学術情報システムの今後の在り方、問題点を中心に議論がなされた。とりわけ注目したのは、将来的には、標準化可能な大学の機械化と各大学独自の機械化を並行して行うということであった。

分科会では、収書分科会に参加したが、収書業務の機械化だけでなく、トータルシステムをめざした機械化を考える必要があるのではないかということであった。

全体会では、各分科会の意見の集約が行われ、議論がなされた。この全体会では、特に、今日の大学図書館が研究・教育に資するために、学術情報システムが必要な条件であると共に、増大する一次情報の中から、有用な情報を捜し出すためには、二次情報のデータベースをコンピュータによって検索することが、最も有効な手段であることも確認された。

今後の研修会、研究集会等で、機械化、学術情報システムが中心テーマになって議論されるであろうし、情報化社会に対応していくために、コンピュータに対する関心をさらに深めなければならぬと痛感した。
(整理課・係長)

「私大連盟一般研修図書館関係」に参加して

渡辺 浩之

私が参加した私大連盟の研修は、愛知県幡豆郡のグリーンホテル三ヶ根で、昭和58年10月11日～14日まで行われた。参加対象が、3年以上の図書館経験者で、年齢30歳前後までのものとなっていたので、活気あふれる研修となった。その内容は、講演とグループ討議、それに全体討議である。まず講演では、筑波大学の中山氏による「未来の図書館」が、特に興味深かった。次にグループ討議は、あらかじめ提出していたレジュメに基づき、10名前後のグループに別れて討議するものである。私の場合は、洋書整理のグループに参加した。討議の内容は、各図書館での日常業務や機械化についてが中心になった。ここでは、各館共、自館によるオリジナル目録作成の割合を、少しでも下げようと努力していること、また機械

化については、慎重であり、まだ土台づくりの段階にあることがわかり、ためになった。次に全体会議では、慶応大のJP MARC利用システムとICUのUTLAS利用について、報告と質疑応答があった。ここで述べられたことは、機械化は、省力化というよりは、単調な業務からの解放と利用者へのサービス強化が行えるということであった。そして最後に各グループの代表者が、討論の内容を発表して、それに対する質疑応答が行われ、閉会となった。私はこの研修に参加して、図書館を機械化する上で重要なことは、日常業務の現状分析と、館員一人一人が、なんの為の機械化か、またどういう方向へ進もうとしているのかを、十分認識することであると感じた。

(整理課・洋書整理係)

レファレンス事例 (13)

参 考 係

最近利用者から寄せられた参考質問のうちから、2・3の事例を紹介して、他の利用者の参考に供したい。

〔質問1〕 2・3年前川崎市で起った金属バット殺人事件の新聞記事を見たい。

回答例： 日にちがはっきりしない時に使用すると便利なのが、「新聞雑誌記事カタログ」（日外アソシエーツ）である。これは2年間の累積版で、中央、地方の一般日刊紙をはじめ、各種の新聞、雑誌56誌の記事カタログで、事項索引が付いているのが有用である。

〔質問2〕 明治初期に、「ザンギリ頭を叩いてみれば、王政復古の音がする………」という歌がはやったそうですが、その当時の世相を反映したその歌が載っているものが何かないだろうか。

回答例： 明治時代ということですから、「明治ニュース事典」（毎日コミュニケーションズ、昭58）の事項索引で調べてみると、「新聞雑誌」の明治4年5月発行のものに載った記事の抜粋が出ている。それによると次のようになっている。

「近日里俗の歌に、半髪頭をたたいてみれば、因循姑息の音がする、惣髪頭をたたいてみれば、王政復古の音がする。じゃんぎり頭をたたいてみれば、文明開化の音がする………」と。

〔質問3〕 宗教科教育法という科目を開講することになったが、免許を修得するのに必要な専門科目やその単位数等が知りたい。

回答例： 「教育職員免許法施行規則」に具体的に、宗教という免許教科に必要な専門科目とその修得単位数等が載っている。

〔質問4〕 昭和40年、50年、58年の消費者物価指数と賃金（実質）の指数の推移を知りたい。

回答例： 「日本統計年鑑」の58年版を見ると昭和50年以前については、5年おきの、昭和50年以降については毎年、55年を100とした場合の指数がでている。ちなみにそれによる指数の推移を示せば、次のようになっている。

消費者物価指数と賃金指数の推移

昭和55年=100

年	消費者物価	賃 金（実質）
昭和40年	32.4	47.2
50年	72.9	93.7
55年	100	100
58年	109.7	103.8

〔昭和58年度については、「日本経済指標」（経済企画庁）昭和58年2月号より〕

〔関連質問〕 世界各国の消費者物価指数の推移を知りたい。

回答例： ◦United Nations Statistical Yearbook
◦Monthly Bulletin of Statistics
◦国際統計要覧（総理府統計局）年刊（前記2つの資料の邦訳を掲載）
◦International Financial Statistics（IMF）などに載っている。

☆ ニュース・お知らせ ☆

＜図書館委員会＞

- 58.11.18 ①59年度図書館予算の申請について
 58.12.16 ①教員貸出図書確認の取扱いについて
 59.2.17 ①オンライン文献情報検索サービスの実施について

＜研修・出張＞

- 昭和58年度大学図書館職員講習会
 58.11.8～11 於：大阪大学
 板谷司書補出席
- 第15回（1983年度）国連寄託図書館会議
 58.11.10、11 於：東京大学
 小嶋司書出席
- 昭和58年度私立大学図書館協会 秋季西地区部会
 58.11.11 於：広島修道大学
 倉光係長出席
- 昭和58年度福岡県・佐賀県大学図書館協議会福岡地区研究会
 59.1.31 於：福岡教育大学
 杉野、大羽、品川司書、板谷司書補出席
- 科学技術情報流通技術普及説明会
 59.1.27 於：熊本市（水前寺共済会館）
 今永課長、杉野司書出席
- 第15回資料研修会（専門図書館協議会）
 59.2.16 於：福岡市（九州経済調査協会）
 荒川係長、坂口司書出席
- ジャパン・マーク利用者懇談会
 59.2.16 於：日本図書館協会
 杉野司書出席

＜在庫調査の実施＞

去る3月6日～13日にかけて、例年のとおり年1回の蔵書点検を行った。図書館所蔵の約40万冊

の図書について、1点1点現物との照合調査を行い、併せて目録、原簿等の整備をはかった。

この間利用者の皆さんにはご迷惑をおかけしました。

告知板

○春休み中の開館

2月4日（土）～4月10日（火）の春休み中も、平常通り9時～21時まで開館します。但し、学習室は閉室します。

○春休み長期貸出

1月24日（火）～4月23日（月）

（但し、卒業予定者は2月末日まで）

対象および冊数	学部学生	} 5冊以内
	専攻科生	
	留学生別科生	10冊以内
	大学院生	20冊以内

○卒業後の図書館利用の手続き

本学卒業生は、社会に出てからも職務上の研究・調査など、あるいは自己の教養・知識向上のため本学図書館を利用することができます。利用希望者は特別利用者規則に従ってご利用ください。

特別利用者証発行については、次のものを提出しなければなりません。

- | | |
|-----------------|------|
| ① 特別利用許可願（本館備付） | 1通 |
| ② 卒業証明書 | 1通 |
| ③ 証明書用写真（3×4cm） | 1葉 |
| ④ 印鑑 | |
| ⑤ 手続料金（1ヵ月） | 100円 |

※入館、貸出手続きは在学中と変わりませんが、貸出冊数および期間は年間（休暇中を含め）を通じて3冊、11日以内です。